

Editorial 創刊に向けて——心は機能か現象か、それとも……

編集委員長 渡辺恒夫¹

1. 心の科学の時代？

ガリレオ・ガリレイに始まる近代科学は、まず物質の科学を（ニュートン力学・相対論・量子物理学）、ついで生命の科学を（進化論、分子生物学）確立させた。次はいよいよ、心の科学の番だ。

ということで、世紀の変わり目の頃から、心の諸科学は、人類科学史上最大の問題ともいえる心と意識の科学的解明に向けて、かつてない活況を呈しているかに見える。

が、それと共に、混迷も深まっている。

そもそも、ある科学を科学として成立させるには、対象と方法が定まることが必要だ。ところが心の科学では、その両方が、最初から混乱しているのである。

まず、「対象」の方からいこう。

2. 心の科学の対象は何か？

対象は心である。それは自明に思われる。

けれども、かんじんの心なるものは、いったいどこにあるのか。

これが物質科学なら、対象として河原から丸い石ころを持ってきてもよいのである。じっさい、丸い小石を転がせればガリレオの、運動法則を発見するにいたった実験ができる。落とせばニュートンの（リンゴが木から落ちるのを見て思いついたという逸話の真偽は別として）、力学法則につながる実験となるだろう。水に沈めて比重の実験をするのもよし、砕いたり焼いたり酸に漬けたり、磁石を近づけたりと、ありとあらゆる実験観察の材料にできる。河原の石ころは、物質科学の対象としての「物」の一典型例として不足はないのだ。

生命科学の対象としては、草むらではねるアオガエルを捕まえてきて……とここで、中学の生物でやらされたカエルの生体解剖を思い出して気分が悪くなったのでやめるが、とにかく一匹のカエルが、「生きもの」の一典型例として役不足ではないことは、認められるだろう。

ところが、「こころ」に関しては、「ハイ、これが心です。典型例です。一緒に研究しましょう」などと言って始めるわけにはいかない。まず、自分の心から始めるか他人の心から始めるかという、認識論的決断を迫られてしまうではないか。

3. 心は脳の機能か？

ここで、そんなバカな、と反発する読者もいることだろう。心は心であって、自分の心も他人の心も、その一例であることには変わりはないではないか、と。けれども、たとえば、「痛み」といった心理現象について、自分の痛みという経験の自己観察から始めるか、他人の痛みの観察から始め

¹ 東邦大学名誉教授/ 心理学・現象学

るかで、研究方法が少なくとも最初は違ってきてしまうように思えないだろうか。事実、心理学には、自己観察から始まる心理学（内観心理学・現象学）と他者観察から始める心理学（行動主義心理学・生物心理学）という、対極のあいだを大きく揺れ動きながら「分裂抗争」を重ねてきたという、300年に亘る「負の歴史」がある [1][2]。

それでも、現代の心の科学は、ついに確実な対象として、「脳の機能」を見出した、という人も多いだろう。じっさい、この数十年のあいだに、「科学者社会」の定説として、「心は脳の機能である」という命題は、定着しつつあるかに見える。最近も、東大医学部教授による、「精神医学は、医学の一分野として位置づけられて来た。医学の各分野は、特定の臓器とその機能を扱うが、精神医学の場合、臓器＝脳であり、機能＝こころである」[3]という文章に出くわした。

この「心は脳の機能である」という文言だが、目にするたびに私は、こんな文法的におかしな言葉づかいをどうしてするのだろうかという思いを禁じえないのである。「食品を冷やすのは冷蔵庫の機能である」「人を載せて走ることは自動車の機能である」というように、日常的な機能の説明はふつう、「XすることはYの機能である」という形式をしている。Xは必ず動詞形なのだ。ところがこれにならうと、「心することは脳の機能である」という、意味不明な文章になってしまうではないか。

想像するに、「心は脳の機能である」というみょうちきりな表現でもって言いたいことは、「見たり考えたり喜んだりする心の機能とは脳の機能である」ということではないだろうか。端的に言えば、「心の機能とは脳の機能」であり、つまりは「心は脳である」ことになる。ところが、これでは身も蓋もなく響く。だから、無意識のうちに、あいまいで文法的に破綻した表現を取るのだろうと、私は推察している。

じっさい、「心は脳の機能である」という文法的によく分からない命題をかみ砕いて一般向きに解説しようとして、指導的な脳科学者でもかえって墓穴を掘っている例が見つかる。次の文章は、理化学研究所脳科学総合研究センター精神疾患動態研究チーム・チームリーダーで精神科医でもある加藤忠史氏の、一般向きの書籍にあるものだ[4]。

「脳と心は別のものか、同じものか、という議論があるが、これは意味がない。『時計』と『時間』は別のものか、という問いと同じである。時計という物体の機能が、時間を刻むことなのであり、物体と機能が同じものかと議論することには意味がない。」(p. 129)

これは、文法的というより論理的混乱ではないのか。前半での「時間」が後半で「時間を刻むこと」にすり替えられてしまっている。なぜ、このような論理的混乱の代償を払ってまで、「心は脳である」というシンプルな定義を回避したいのだろうか、その理由は何か、という疑問が沸いてくる。その隠れた理由とは動機とは、「心」という主観的なものを、「脳」という客観的なものと同一視したり、前者を後者で因果的に説明したりすることに、何となく無理があるように漠然と感じているからではないだろうか（ちなみに精神科医でもある加藤氏のこの議論には、今日のアメリカ精神医学を特徴づける「操作的診断」[5]の背景をなす操作主義哲学[6]の影が感じられる。この哲学はまた、「知能とは知能検査によって測られるところのものである」などとする悪名高い「操作的定義」の哲学的背景にもなっているが、同じように「時間とは時計によって測られるところのものである」という操作的定義もあり得るかもしれない。けれども、それならそれで、操作的定義について一言

しておかなければ、やはり何のことやらわからない)。

4. 心は脳の生み出す現象である？

心は脳の機能説よりましな例も、脳科学者の書いたものの中には見出すことができる。次も、たまたま手に取った本で目にした一節だ。

「脳とは、感覚、認知、情動に関するデータを収集して処理する物理的な構造の集合であり、心とは、脳の認知過程から生じてくる思考、記憶、情動などの現象である」と定義しよう。簡単に言うと、脳が心を生み出すのだ。」[7] (p. 54)

これによると、心は脳によって生まれる「現象」である、ということになる。「機能」とは随分イメージが違っているではないか。

「機能」を「現象」に代えることで、生じる最大の変化は何か。それは、「現象」というからには「誰に対して現象するか」が問題になるはずだからである。「現象」とは常に、観測者である誰かに対して現れる現象であって、観測者がいなければ現れないはずだから。

では、いったい誰に対して現れるのだろうか。観測者である誰とは誰か。それは、当の脳それ自身に外なるまい¹。したがって、この定義は次のようにならねばならない。

「心とは、脳の働きが、当の脳それ自身である観測者 (observer as the brain itself) に対して現れた現象である。」

5. 「心」の定義に現れる「観測者」と「自己」

この新たな定義が元の定義と異なっている点はどこか。

まず、「観測者」という語が加わっている。これは自然科学では、量子力学における「観測問題」[8]を除いては、まずあり得ない事態だろう。月の裏側が旧ソ連の月探査機スプートニクによって観測されたのは1959年のことと言うが、観測される以前に月の裏側が存在したかの議論があるわけではない。これに対して、観測者が存在しないような「心」は存在しえない。心が存在するためには、少なくとも一個の観測者が必要である。

それは誰か。それはすでに定義に含まれている。「当の脳それ自身」である。

6. 心の科学は「自己と他者」という対概念を必要とする

ここで、この定義に異議を唱えたいくなる人もいるだろう。心は、当の脳それ自身に対して現れる現象であるだって？心は他の脳に対しても(つまり他者に対しても)現れ、現象するのではないか。あなた(という脳)の微笑を、私(という他の脳)は、単なる顔面筋のひきつりという物理現象としてでなく、「喜び」として直接知覚するのではないか。これは、心が、当の脳それ自身 (the brain itself) としての観測者だけでなく、他の脳 (other brains) としての観測者に対しても現象するということ

¹ じっさい、同じ本の別な箇所では、「心とは脳がそれ自身の機能を経験している状態のことであり、脳とは心の構造である」(p. 61) という定義をみることができる。

ではないか、と。

他者の笑いの知覚が他者の感情の直接の知覚になるというのは、現象学者マックス・シェーラーが1924年に、「他我の直接知覚説」の名のもとに唱えた説で[9]、現代にまで続く論争の発端にもなっている。この論争自体が、こころの科学のエピステモロジーの重要なテーマの一つなので、ここでこれ以上論じることはしない。が、最低限わかってくることがある。

それは、ここで the brain itself と other brains と英語表記するとはっきりするように、self (自己、自分) と others (他人、他者) という対概念が出現していることだ。心とは、観測者という概念を含むだけでない。観測者が自分か他人かが問題になるような存在なのである。

こうして私たちは振り出しに戻ってしまったように思われる。「自分の心 vs. 他人の心」などという、自然界には実在しないはずのカテゴリーを無用にすべく、「脳の機能」を心の科学の共通の機能として見出したはずだった。ところが文法的論理的混乱に直面して、「脳の生み出した現象」へと移ることによって、再び、自己 vs. 他者の対概念が、復活してしまうのだから。

7. 『こころの科学とエピステモロジー』誌に望むこと

心の科学の対象は何かの議論だけで、長くなりすぎた。方法の問題は、それこそ本誌の主要なテーマになることだろうから、今後の議論に譲ろう。ただ、心という研究対象の定義が異なれば、方法も当然異なってきてしまうことを、理の当然として最低限指摘しておこう。

心は脳の機能であるというなら、脳の機能を研究するのが、心の科学の主要な方法となる。それは、脳科学を始めとする自然科学志向の心の諸科学の大多数で採られてきた方法に他ならない。ところが心が現象なら、現象そのものを研究対象とする方法が必要となる。これが、質的心理学や現象学の、現代的再興になっている。自己に対する現象を研究対象とする「当事者研究」も[10]、ここに入れられるだろう。さらに、心を「他者の現象」として研究するにはコミュニケーションが必要になってくるから、ディスコース分析やエスノメソドロジーのような、心理現象をコミュニケーションによって構成されたものとみなす、社会構成主義的な諸潮流が登場する、という具合だ。

このような方法論的多様さ以前に、心の科学の対象を定義しようとする短い試みの中でも、もうすでに、容易ならぬ認識論的存在論的問題があぶりだされてきていることがわかるだろう。心脳同一説や二元論やスーパーヴィーン説（心理現象は脳過程に随伴(supervene)するという説）などをめぐる、心の哲学の諸問題。すでに述べた、「観測者」をめぐる量子力学にもつながる問題。自己と他者というカテゴリーは根源的かそれとも言葉の誤用が生み出す錯覚かという、現象学と言語分析とをめぐる大きな対立点、さらには、精神医学における操作的診断の背景にある操作主義哲学の妥当性、等々。

他にもいろいろあるだろうが、他の編集委員による指摘に任せるとして、ここでとりあえず結論をいうならば、これらのエピステモロジカルな問題を度外視して経験的研究を重ねても、しょせんは堂々巡りに陥ってしまうことは、心の科学の混乱を極めた歴史が証明していると私は思う[1][2]。

8. 「エピステモロジー」の語に込められた狙い

最後に、誌名に、「認識論」ならぬ「エピステモロジー」というカタカナ語を用いた狙いについて、一言しておこう。私の主観によればこれは、"epistemology"という英語に対応するカタカナ英語ではない。"épistémologie"というフランス語に対応するカタカナフランス語なのである（英語誌名で"epistemology"になるのは仕方がないが）。ガストン・バシュラール著『科学認識論』[11]の訳者解説やクセジュ文庫の『エピステモロジー』[12]、さらには日本人エピステモロギによる『認知哲学 心と脳のエピステモロジー』[13]を一瞥すればわかるが、フランス語圏では"épistémologie"とは科学的知の批判検討を意味するのであって、日本語や英語でいう「認識論」よりはよっぽど本誌の趣旨にとつて的確な意味を込めることができる。

さらに、わざわざエピステモロジーというカタカナフランス語を誌名に使った意図は、もう一つある。こころの科学の哲学・メタ理論として、すでに触れたところからも窺えるように、近年、海外では英語圏科学哲学の流れと、大陸系現象学・解釈学の流れとの交流が盛んになっている。こころの科学関係では、"Journal of Phenomenology and the Cognitive sciences"といったジャーナルが代表格だ。けれども日本では、各学会誌は特定の分野や立場で固まっていて、このような交流を促す場があまり見られない。個人的には、このような大陸系と英米系の科学哲学上の交流と対決こそが心の科学に真の豊かさをもたらすものだ、と信じているのだが。

本誌の誌名には、そのような交流と対決の場という意味をも、込めたつもりである。

参 照 文 献

- [1] 高橋濤子 (2016) 『心の科学史——西洋心理学の背景と実験心理学の誕生』 <講談社学術文庫> 講談社.
- [2] 渡辺恒夫 (2014) 『他者問題で解く心の科学史——心の科学のための哲学入門②』 北大路書房.
- [3] 笠井清登 (2013) 精神医学とは何か. 中山剛史・信原幸弘 (編) 『精神医学と哲学の出会い』 (30-35), 玉川大学出版部.
- [4] 加藤忠史 (2009) 『うつ病の脳科学』 <幻冬舎新書>, 幻冬舎.
- [5] 佐藤裕史・Berrios, G. E. (2001) 操作的診断基準の概念史——精神医学における操作主義. 『精神医学』 43 (7), 704-713.
- [6] Bridgman, P. W. (1953) The logic of modern physics. In H. Feigl & M. Brodbeck (Eds.), *Readings in the philosophy of science* (34-41). New York: Appleton Century Crofts (Original work published 1927).
- [7] ニューバーク, A., ダギリ, U., ローズ, V. (2003) 『脳はいかにして<神>を見るか——宗教体験のブレインサイエンス』 茂木健一郎 (監訳), PHP 研究所 (Newberg, A., d'Aquili, E. & Rause, V. (2001) *Why god won't go away: Brain science and the biology of belief*. Random House, Inc.).
- [8] 森田邦久 (2011) 『量子力学の哲学』 <講談社現代新書> 講談社.
- [9] シェーラー, M. (1977) 『同情の本質と諸形式』 青木茂・小林茂 (訳) 白水社.
- [10] 浦河べてるの家 (2005) 『べてるの家の当事者研究』 医学書院.
- [11] バシュラール, G. (2000) 『科学認識論』 竹内良知訳, 白水社.
- [12] バロー, E. (1995) 『エピステモロジー』 <文庫クセジュ> 松田克進 (訳), 白水社 (Barreau,

渡辺恒夫 (2017) Editorial 創刊に向けて——心は機能か現象か、それとも……

H. (1992) *L'épistémologie. Que sais-je?* No 1475. Paris: P.U.F.)

[13] 山口裕之 (2009) 『ワードマップ認知哲学 心と脳のエピステモロジー』新曜社.